

東北地方におけるサキグロタマツメタによる

アサリの食害とその対策

○大越 健嗣・杉林 慶明 (石巻専修大 理工)

キーワード：サキグロタマツメタ・アサリ・食害・外来移入種

【目的】サキグロタマツメタは主に中国や韓国沿岸等に生息する貝食性巻貝で、国内では有明海や瀬戸内海等西日本に少数生息していることが知られており、有明海では絶滅寸前といわれる希少な貝である。生息の北限は三河湾とされており東日本や北日本ではこれまで生息が確認されていなかった。ところが、1990年代後半から浜名湖や木更津などのアサリ養殖場でサキグロタマツメタの発見が相次ぎ、東北地方でも1999年に宮城県の万石浦で生息が確認されている。サキグロタマツメタは養殖アサリに穿孔して捕食することから、アサリの食害生物として一般にも知られるようになった。演者らのこれまでの調査で、サキグロタマツメタは輸入アサリに混じって国内に移入した「外来移入種」であること、その一部がアサリ養殖場とその周辺に定着して再生産していること、個体数が増加しアサリの食害が無視できないレベルにまで達していること等が明らかになった。さらに、2004年3月には福島県相馬市の松川浦でも生息が確認され、さらに4月には宮城県鳴瀬町東名浜でサキグロタマツメタの食害のために前年秋に撒いたアサリが激減し、観光潮干狩り場がオープン数日で閉鎖に追い込まれるという事態が発生し、サキグロタマツメタによるアサリの食害は全国ニュースにも取り上げられ、広く知られることになり現在に至っている。そこで本研究では、東北地方におけるサキグロタマツメタの生息状況を把握するとともに駆除のための基礎的知見を得ることを目的とした。

【方法】宮城県、福島県を中心に東北地方におけるサキグロタマツメタの生息状況を調査した。調査は2001年から2004年まで行った。サキグロタマツメタの大型個体の他、再生産されたと考えられる10mm以下の小型個体の探索も行った。また、卵塊(砂茶碗)の有無、発見された時期なども調査した。岩手県等一部の地域では聞き取りによる調査も併せて行った。サキグロタマツメタを水槽飼育し、アサリ、オキシジミ、イソシジミなどへの捕食行動を観察するとともに単位時間あたりの捕食個体数を求めた。卵塊を飼育し、ハッチアウトまでの発生過程を観察し、発生までの時間を推定した。2004年9月～10月にかけて宮城県の万石浦と福島県の松川浦で地元漁協が行った卵塊の一斉駆除の結果から卵塊の量を推定した。

【結果および考察】宮城県では、万石浦、松島湾、鳥の海で、福島県では松川浦で、岩手県では宮古でそれぞれサキグロタマツメタの生息を確認した。万石浦、松島湾、松川浦では大量の卵塊と小型個体の生息が確認され、すでに再生産し定着しているものと考えられた。松島湾では、過去にアサリを撒いたことがないと考えられる野蒜海岸や松島海岸などでもサキグロタマツメタの生息と卵塊が確認され、分布域を広げていることが示唆された。1平方メートルあたり最高で25個体が生息している場所があり、卵塊は9月から11月まで観察され、2004年9月の一斉駆除では、松川浦で約1500kg(8日間の駆除)、万石浦で約700kg(1日の駆除)の卵塊が陸揚げされ、10万個以上の卵塊が産出されたものと推定された。ひとつの卵塊からは約1000～3000の幼体がハッチアウトし、発生様式は直接(直達)発生であることがわかった。飼育実験の結果、最高で35日間に13個体のアサリを捕食した。駆除には個人や漁協単位ではなく湾や浦全体で取り組むことが重要で、移入の阻止、親貝・稚貝の除去、卵塊の一斉駆除などを粘り強く行うことが有効と考えられる。本研究では、石巻湾漁協の阿部卓也氏、宮城県水産研究開発センターの酒井敬一氏、福島県水産試験場相馬支場の平川英人氏、相馬双葉漁協の菊地寛氏にお世話になりました。記して謝意を表します。